
リバイバル・ヨミ・プロジェクト

企彩櫛花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバイバル・ヨミ・プロジェクト

【Nコード】

N1415D

【作者名】

企彩櫛花

【あらすじ】

主人公、平田陸は交通事故によって死んでしまった。死んだ後の世界で出会った神様と生き返るために三日間だけ生き返り、『神宝』というものを探することになった。しかし、現実的ではないものばかりを神様に見せられることに・・・。

ブローグ

キーツ！ガッシャーン！

交通事故だ。それだけは理解できた。

加害者、ドライバーの人。被害者、自分。

急いで救急車もやってきたようだが、勢い良く頭を打ったせいか、失神状態でその場に恐ろしい姿で寝込んでいた。

病院に運ばれて、妹、陽奈の声を聞いた気がしたが、いつの間にか自分が起き上がったときはそこに現実という空間は存在しなかった。

「どこだ？ここは・・・。」

と、独り言を呟く。下には青く見える透明な道、それが駐車場のようにくるくると上のほうに上がっていくように見える。そして、その後ろ、崖のように下が真っ暗なとてつもなく大きな穴が開いていた。

あえて下に落ちるという手もあるが、そんなことしたらたぶんだが、どうにも

ならないだろう。この場合は上に、上にひたすら登り続けるしかない。

しばらく滑って転び落ちそうなくらいの急な坂を歩いていると平らな所に着いた。そこにはとてもきれいな青い液体が流れていて、何やら、人が白い宗教のような服を着ていて、笑顔で自分を迎える。そこには、船とオルがある。その青い液体の先に何があるかはここから見てもわからない。渡るのか？そして僕は後ろを振り返る。「道が、無い！？」

再び前を向くと白い宗教のような服を着た人が手招きをしている。早くしなければ今自分の立っている道まで消えてしまうのだろうか？僕は白い宗教服を着た人の乗った船に乗る。

よくいらつしました

頭に誰かが語りかけてくる。

私は神様です

なんて悪い夢だ。確かに僕は交通事故にあった。しかし今は病院の真っ白なベットに横になっているはずだ！

「どうぞ」

白い宗教のような服を着た人は無表情のまま言う。そして目の前にはヒガンバナの花畑。

さあ、ここは天国です

神様らしい人はヒガンバナの花畑を天国と呼ぶらしい。縁起が悪い事だ。ま、直にこんな夢覚めるだろう、天国とやらを満喫してやるうと思う。

「っ！」

夢か・・・。

そう思っただけ起きたつもりが、今いるのはベッドではなく、青く見える透明な道だった。死んじゃったのかな？僕・・・。

そう思ってもしょうがないので、再びこの長い道を登り始めた。

第一話 不条理な現実

「だる……。」

と、神様らしい人が言う。なんとこのままで来ての態度だ。

「あんさ、神様ってね、偉い人のはずなのに、なんで三途の川の前で死んだ人をいちいち待っていたりさ、長い長い三途の川を渡る船のオールを漕いだり、その後はな、この忌々しいぐらに花の匂いのキツイ畑なんかに行かなきゃいけないんだ。」

「……神様ってこういう人なんだ？と、疑問を持つ。いい加減な人で、いい加減すぎる人だ。」

「とりあえずね、街はここから三キロメートル程あっちの道を歩けば行ける。あと、街に行くときは、入場するために必要なパスポートがある。それは今な、俺の手元にある。タダでやるから、ほら、さっさと言ってくれ。」

「は、はあ……。」

ここから三キロメートル……遠いな……。さっきまですごく急な坂を登って行って、オールを漕ぐのを手伝わされたっていうのに今度はそんなに歩くっていうのか……。

「あと、言い忘れたが、ここから超オトク情報だ。」

「オトク……情報？」

神様からのオトク情報。いったい何なのか。神様の世界でのオトク情報。人間界級ではないということになる。

「今まで忘れていたせいで、一万年ほど誰にも言っていなかったが、実はな、三日間だけ生き返るキャンペーンがある。これはお前らの世界で言う一万年ほど前から、二十一世紀の始め頃。正確には二千年十一月二十四日、今日までなんだ。それでな、三日間以内にだ、『神宝』というものを手に入れば、生き返ることが出来る。」

「へー。そうなんですか。」

つまりこのキャンペーン対象は自分だけってことだ。そして、『神

『宝』というものを手に入れば、生き返ることが出来る。つまりだ。今、自分は死んでいる。

「それでだ、その『神宝』を探すための話だが、あくまで俺は生き返らせると言っただけで、その魂を現実界、リアルと言えば良いか。ここはジオルという。そこで動かすための体が必要になる。それは生きている上に、その体の持ち主から許可をいただく必要がある。」
「なんかややこしい話になってきた。」

「だからだ、体が無ければ、このキャンペーンも受けられないということだ。だから、今から六時間以内に体を捜して来い！リアルに六時間だけ帰らせてやる。」

「は、はぁ・・・。」

なぜか命令された。タイムリミットは六時間、だとのこと。

「うわぁ!？」

急に目の前が真っ暗になる。そして、いつの間にか着いていた。

自分の体と、それ以外の人の体が見える。自分の体は動いていなかった。死んでいるということだ。つまり、自分の体以外で動く必要があるということ。

「お兄ちゃん・・・。」

陽菜が僕の目の前で泣いている。タイムリミットは約五時間と五十八分。まだまだ楽勝だ。よし、陽菜の体を借りよう。

陽菜、聞こえるか？

僕は現実には聞こえる声が出せないでテレパシーのようなもので語りかけてみる。

「・・・。」

相変わらず陽菜は泣いたまま・・・やはり通じないのだろうか。

陽菜！聞こえない？

「お兄ちゃん？」

通じた！

陽菜、聞こえるか？今兄ちゃんは幽霊になってお前をお願いを

しに来たんだ。

「ユーレー？お、お化け！？」

声に出さなくていい！心で話せば大丈夫だ！

「わかった」

だから心で言えば………ほら、父さんや母さんが変な目で見てるぞ！

「わかった。聞こえる？」

ああ、聞こえるさ。

『了解』

で、早速頼みたいのだが………

『うん、でも死体を焼く時に一緒にお兄ちゃんのベットのベットカバーの裏に縫い付けてあるポケットの中にあるエロ本と一緒に燃やせて言うお願いは勘弁ね』

ああそれは大丈夫………って何故それを！？まあいい、お願いというのだけど………陽菜の体を貸してくれないか？

『え、や、ヤダヨ！！』

いくら兄のためとはいえども陽菜も十四歳………さすがに兄なんかには貸したくないはずだよ………

じゃあこういう話に持ち替えてみよう。僕を三日間だけ生き返らせてくれないか？

『三日間だけ？なんでよ。どうせならずつとでも良いのに。』

いい加減な神様にさつき会ってきた。嘘じゃない。紀元前七千年から二十一世紀の最初ぐらいまでよくわからないキャンペーンがあつてな、それに参加するためさ。

『その神様の話もキャンペーンの話、嘘でしょ？』

本当だ。今までお前に嘘をつくことはありすぎたが、今度は本当だ。そのキャンペーン、内容についてだが、三日間他人の生きた体を借りることを条件に、参加が可能です。この世のどこかに置いてあるという『神宝』という宝を見つけ出せば、生き返ることが出

来ます。 たったそれだけだ。

『ますます嘘っぱい。』

と、まあこんな感じに信用しようとしないうマイシスター、こうして一生のお願いと言わなければならないが、生きていないので言えない兄の頼み。

まさに歯車で例えたら、両方とも噛合わずにぶっ壊れるね。

『お兄ちゃんさ、結局、生き返りたいんでしょ。』

いや、生き返りたいわけではない。ただ神様に無理やり参加させられたというか、キャンペーンに参加し終わるまで天国から追いつめられたと言わなければならない。

どういふことなんだろう。結局ここまで来ての話だが。

『お兄ちゃんみたいなのが天国行けるんだね。そっちのほうに驚いたほうが良いかも。』

ちなみに言っておこう。体を借りるために用意されていた期間は六時間です。ここの時計を確認する限り、あと五時間五十五分ぐらいだ。

と、一日考えさせて、と言わせない作戦に出る。誰でもわかるだろう。重要な考え事はなぜか一日考えてしまう人間の特徴のことを。

『で、お兄ちゃん。』

なんだ？

『姿、見せてくれない？』

無理。やり方知らない。でも心霊現象なら起こせるかもしれない。ポルターガイストとか。

『やってみせてよ。本当に幽霊さんなのか確かめてやる。』

そんなのは必要ないな。まずテレパシー的なことを今やっている。つまりそれ自体が僕が幽霊だという証拠だ。

『私の勝手な妄想かもしれないでしょ！』

と、なぜか心の会話で怒られる。これじゃ一方的な以心伝心をする気じゃなくなる。

『とりあえずいろいろな意味でこの体を貸しちゃ、いけないの。』

わかった？』

そうか、今ならもし生き返ることが出来たら、ケーキとかお菓子とかおごってやってもいい気分なんだけどな。

とりあえずこの方法をとってみる。妹の好きな食べ物、甘いものオンリーだ。

『本当に！？じゃなかった・・・。そんな釣竿は簡単に破壊しちゃうよ。』

とのことだ。この妹、なかなかしぶとい。

しょうがない。じゃあ言おう。僕はね、今ならどんなことでも出来る。お前を操ることができる。幽霊さんだからね。目の前に怪物を出現させて驚かせることも出来る。幽霊さんだからね。お前の存在を消すことも出来る。幽霊さんだからね。それでも良いのか？

こんなに言い張った。しかしだ。こんなこと出来ない。単なる脅しで、いろんな意味で大人が子供に言うことをきかせるときの冗談に聞こえてくるような感じもする。

『そんなあ。お兄ちゃん、そんなことしないよね？』
お前が僕に体を三日間貸してくれたらな。

『しょうがない。存在消されたくないし、生き返って欲しいし、許可するよ。』

サンキュー。

『ただし！プライベートな時間、趣味の時間、私が断固拒否したその時間、以外の時間だけだよ！わかった！？絶対変なことするんじゃないよ！わかったね！』

と、テレパシー状態だからこそ言えるようなことを連発された。意外とコイツの本音はかなりヤバイ。

でも、そう言ったからには、とりあえずだ。とりあえず体を借りることに成功した。

じゃあ、神様のところに戻るね。

『う、うん。絶対戻ってくるんだよ。』

ああ、保障はできないが約束する。

そう言った途端に、再びあの嘔吐寸前の状態になりそうな、目の前の真っ暗が訪れる。そして、目を開けた。

第二話 蘇生の法則

そう言った途端に、再びあの嘔吐寸前の状態になりそうな、目の前の真っ暗が訪れる。そして、目を開けた。

再び川の目の前に、宗教的な白い服を着た．．．いい加減な神様がいた。

「やりましたね」

「やってやった」

「でもよくやれましたねえ．．．．．前回のキャンペーンに弾かれた人は体の提供人が見つからなくて．．．．．」

「追放したのか？」

「追放するわけないじゃない！んな事したら地獄の玖劉閻魔に怒られちゃう．．．．．」

「閻魔に怒られちゃうって．．．．．」

「ちなみに玖劉閻魔は教師も始めたらしいぞ」

「そんな無駄知識はいいからはやく次のステップへの行きかたを教えよ」

すると神様は呆れた顔をした。

「神様は無駄な話をしないんですけどお．．．．．」

「じゃ、じゃあ次のステップって．．．．．」

「丑刻ちゃんに最寄のハム園に行つてね！」

「関係ないじゃん！．．．．．つかハム園じゃなくて公園だろ公園！」

ほんといい加減な神様だな。

「じゃ、行つてらっしゃい！」

「ちよつと待つてよ！まだ何をすればいいのか．．．．．」

「行けば分かります！」

そして目の前が真っ暗になった。これまた嘔吐寸前になりそうなこと。目をつぶっているのにくらくらする。

ちなみに、目を開けたときにはもう幽霊なのに動く体力がなくなるほどキツイ状態だ。さらに言えば、目の前はハム園・・・じゃなかった。公園の看板がある。

「もう着いてるし・・・。」

見慣れもしないどこだか知らない公園だ。

今さら思う。丑刻ちゃんって誰だろう。って。さらに思う。今回のキャンペーン、対象が僕にしか無い上、僕以外に神様は話していない。つまり、前回のキャンペーンの人の話はまったくの嘘だと思う。

「やっと着いたね」

と、いつの間にか目の前にいたまるで自分が待ってたんだぞ、みたいな感じにしゃべった神様がいます。

こちらは嘔吐寸前なのにこちらは超笑顔。うぜえ。殴りたい。

「というわけで、このハム・・・公園には何があるでしょう。」

きつしりとハムと言いつつになったこのいい加減な神様はいきなりクイズ。答えられない。

「わかりません。」

「君は正直なんだな。というかさ、マジで面倒なんだけど。あのさ、まずこっちは『神宝』の場所を知っているってのに、なぜキャンペーン対象が一人の人物に探させなきゃいけないんだみたいな感覚なんですけど。ねえ、もう面倒くさいからさ、十秒でキャンペーン終わらせてくれない?」

「じゃあ『神宝』のある場所教えてくれるんですね?」

と、なんだかチャンスになつてきそうな勢い。

「いや、『神宝』のありかを教えたのばれたら給料減っちゃうからいやだ。いわゆる減給。本当に神様って給料少ないんだぜ?この世、リアルでは恐ろしく偉い人のイメージがあるけど、最近、教師を始めた閻魔の半分の半分の半分の六倍ぐらいだけなんだからな。」

「つまり四分の三ってわけですね。やっぱり神様も給料とか貰ってるんですか。」

率直に一番最適だろう質問をする。

「ああ、貰わなきゃあんな仕事できないね。面倒だぜ。神様は。四兆八千億人程度いるんだがな、俺は、この日本という国の係りをしている。他にも日本を担当しているやつらがいる。だから、死ぬやつが一分に一人だとしても、俺はあんまり働かないですむんだ。ちなみに、地球という星には、神様なる存在が三百万人はいる。」

「多いですね・・・。」

三百万人、つまり、それを大体国の数の二百で割ったとしても、一万五千人は日本に神様がいることになる。

「てことは、キャンペーンを受けている人はたくさんいるんじゃないですか？仮にあなたが言い忘れたとしても、他の人が言ってくれるでしょ。」

「いや、それは無いんだ。日本という国だけでのキャンペーンでな、そして俺たち神様はネットワークのように全員の意思が繋がっているんだ。だから、もうほぼ顔が違うだけの同一人物って考えちゃって良いよ。」

「面倒くさい神様ですね。」

手がかりを手に入れる。この会話の内容からして、『神宝』は日本の中にある？と思われる。

「お、頭良いね、君。『神宝』は日本の中にあるんだぜ。」

「今ので減給ですよ。」

「あ・・・。まあ良いの良いの！放つとけばいいんだよ。ばれたらばれたで、放っておけばいいの！」

まさしくいい加減な神様。

「で、ここで何をするんですか？本題に戻りますけど。」

「ああ、ここで魔方阵を書くんだ。これとこれだな。」

僕の手に渡されたのは、電池で動くと思われるペンライトに、その魔方阵とやらの図形みたいなやつだ。

「ペンライトのスイッチを押して先端部分が光るから、その光で書

く。この図形のとおりにな。ああ、慎重にならなくて良い。大体合
つてればいいの。大体ね。」

と、いい加減な説明を受けて納得した後、作業に入る。

僕の体は浮いているので、まだ動くのに慣れていない。だからと
言って、地面に着こうとするとそのまま通り抜けてしまう。なんと
も悪条件。しかし、神様は大体で良いと言っていたので、円から書
き始めて、その中ではあとで大胆に書くことにする。

「意外と、難しいな……。この図形単純なのに……。」

そのとおりだ。この図形。円と、その中に正三角形が二つ重なった
形に、その重なった部分の中によく意味のわからない文字みたいな
ものを書くだけだ。一文字。

しばらくして、それっぽい図形が出来た。円はぐちゃぐちゃ、正
三角形はもはや三角形じゃない、その真ん中の文字みたいなのはま
あまあ大丈夫かな？みたいな美術で赤点とってもおかしくはない図
形が出来た。

「次に、その文字が書いてあるところの真上に行くんだ。」

「は、はあ……。」

だんだん怪しい気分になってきたが、とりあえず、神様の指示に従
う。

だいたい真上の部分に行ったつもりだ。その数秒後の話。

その魔方陣みたいなのに吸い込まれた。そして、再び嘔吐寸前に
なりそうなのこの真つ暗な空間について、またどこかに放り出された。

「ここは？」

「ここは、異世界、『リアル』でも『ジオル』でもない。『エクサ』
という。数字で言えば十の十八乗、わかりやすく言えば、百京だ。」

「ひやつけい……。すごいな。」

恐ろしい数字が現れる。しかし、この空間に何があるのか、さつぱ
りわからない。ちなみに、なぜかそこに置いてあった、時計をみる
と、あと五時間二十分以内に妹の体に入らなければならない。ここ

で何をしたいのだろうか。

目の前には、なぜか水鉄砲。と、バケツ。何があるんだろう。

「聖なる水をバケツ一杯に入れて来い。三十分以内にだ。あと、そこにある水鉄砲に入っているのは、ただの水。しかし、威力は恐ろしいからな。なぜか補給しなくてもムゲンに出てくる水の不思議さには驚くだろうね。そして、その水鉄砲、重さ三十キログラムの物なら軽々飛ばせる威力があるから、武器として使ってくれ。」

「は、はあ……。」

なにやら威力が恐ろしい水鉄砲を持たされてた。本当なのか確かめるためにためにそこの岩に水をぶつけてみる。

「……なぜ？」

と、驚く理由。それは、岩に穴がきっかりと開いているからだ。破片が弾けたりしない。なぜだろう。

「さあ、わかっただろ！さっさと行って来い！」

と、押し飛ばされる。何も見えなかった、その先にはゲームでよく見そうなモンスターがそこらじゅうにいた。つまり、水鉄砲でこいつらと戦って、先に進めつてのか……。

「おりや、おりや！おりやあ〜〜！」

とりあえずオレは目の前にいるモンスターを倒し道を開く。それにしてもやはりこの水鉄砲は凄い！一度引き金を引くとモンスターを五体くらいを一気に蹴散らせるほどだ！しかも水切れ無しと来た！生前Wiιのバイ ハザードにはまったがこれはそれ以上の快感だ！

そしてあつという間に道が出来る。

オレが同じように敵を蹴散らしていくと目に前には広大な泉が広がっていた。

「これが……聖なる水」

オレはバケツに水を汲む。そして始めの場所へ戻ろうとした。しかし何故かどんどんバケツは軽くなっていく……。

「ん？」

そしてオレはあることに気が着いた……………

「穴……………開いてんじゃない」

ふざけた神様だ！生き返ったら絶対閻魔にあつてあの神様を地獄行きにさせてやる！！しかし水が漏れていることには仕方が無い……………どうすれば？

「あ、あれは！？」

オレは目の前にあるカップラーメンの容器を見つけた。はめ込んで見ると大きさがピッタシだ！オレはもう一度聖なる水を汲みに戻った。

「あれ……………」

水鉄砲の水同様、どんどんいつの間に沸いてきたモンスターが出てきた。

「とりあえず、意味がわからないぐらいに繁殖してるみたいだけど、この水鉄砲があれば余裕だな。」

と、調子に乗りながら威力がヤバイ水鉄砲で情けない姿をさらしながら、敵を倒していく。

「あれ？」

確かこの位置に泉があつたと思う。そして、自分の手にはバケツが無い。

目の前には神様がいた。

「なんで戻ってきたの？それからバケツは？」

「いや、バケツに穴が開いてたんで、戻ってきたんだけどいつの間になくなっていて……………」

「穴？開いてたんだ。まあ良いか。」

とりあえずと、そんな顔を見せた神様はリアルで言う携帯を取り出す。

ちなみに、そこに置いてある時計を見てみよう。とつくに三十分経っている。

「ちよつと待つてろ。」

と言って、エクサの世界からどうやったか知らないが、どこかへ行ってしまった。正確には消えてしまったということなのだろうか。
「ねえねえ」

と、一言かけられる。誰だろう、と後ろを振り向く。

第三話 分身製造法

「こんにちは、私は女神様だよ。なんでこんなところにリアルの間がいるのかな？」

非常に優しそうな顔を見せてニコツと笑うこの人、とりあえず、正直に話す。

「えっと・・・その・・・。僕が事故で死んで、神様に天国に連れてこられて、生き返れるキャンペーンの話を聞かされて、それに参加させられて、いつの間にかここに来てました。」

「神様？というところのいい加減でいい加減に消えて欲しくて弾劾裁判所で消失処分になって欲しくて考えるだけで頭が痛くなるあのバカやろう？それともあの勇ましい姿の天才でそれで頭もよくてかつこよくて、恋人にしたい神様ナンバーワン、それでね、お金持ちで、成績優秀で、家族はあの会社のオーナーで・・・。」

と、なぜか前者の方としか思えない暴言と、後者のほうに対する賞賛、なんとという態度の違い。

「ぜ、前者の女神様が大嫌いな方だと思います。あの人は本当にいい加減ですから。」

「おお！君、気が合うね。お姉さんとどっか出かけないかい？生き返らせてあげるからさ、ね？生き返らせるなんて簡単なことなのだよ。わざわざ変なキャンペーンに参加せずに『神宝』も探さなくても良いしねっ、とても楽に生き返られるよ。」

と、女神様が言う。とても好都合な話だが、非常に忌々しい性格の人だ。

「おい、大天使、俺の客に何やってるんだ？」

「女神様じゃないんですか？」

いつの間に戻ってきた神様が女神様を大天使と呼ぶ。

「そうとも言うな。でも、大天使は偉い。天使の中でも力が強いやつだ。しかし、嫌われている。」

「おい、その非常にウザイ紙くずのような神、仕事しやがれよ。」
「仕事はしている。問題ありか？」

と、神様と女神様がケンカ中。なんという光景、もしかしたら出会っただけでいつもこうなっているのかもしれない。

「良いか、陸、コイツは大天使だが、非常に悪いやつだな。」

「おい、余計なことを言うんじゃない。」

「放つとけ、真実を言って何が悪い。嘘をつくのは神様としての仕事じゃない。それで、本来なら天使と悪魔は小さいまま移り変わりを繰り返すんだ。まず天使は人間の邪気を食べてだんだんと悪魔へとなっていく。その代わり、人間に良い行いをさせるんだ。逆に悪魔は人間の良気を食べてだんだんと天使になっていく。その代わり、人間に悪い行いをさせる。これが基本だ。」

「へー。」

なんかよくわからない話になってきたが、なんとか納得できた。

「それで、この大天使は本来なら人間の邪気を食べる、はずなのだが、良気を食べて、どんどん力をつけた天使になっていくんだ。これはジオルの法律で禁じられている。天使は邪気、悪魔は良気しか食べてはならない。もし法律違反の場合、即刻リアルへ送られる。そして勉強しなおしだ。これが普通なのだが、こいつの場合はな、力を付けすぎたせいで、誰にも押さえつけることは出来ないんだ。」
「つてことは、ゲームで言うところから最強の敵が出てきた。そういうことだ。」

「さらに言うておく。そいつに生き返らせられたら、完全消失の刑だ。いたという痕跡がすべて消えうせる。だから、俺だけに頼れ。」
「うるさい、たかが神が。お前を完全消失させることなんて簡単なんだ。それにね、私には力がある。だからお前を守ることは簡単に出来るんだ。」

と、なんだかどちらを選べばいいのかわからない展開になってきた。でも、妹に約束した。

また戻ってくると。

「女神様、残念ですが、神様に頼ります。僕は妹と約束しましたから。」

「っち。しょうがない。リアルの人間には逆らえない性格だからね。」

偶然にも女神様の性格に救われた気分。しかし、なんかややこしいことになってきた。

「じゃあ、行くぞ。陸。聖なる水は俺がどうにか召喚させておく。」

次に手に入れるものは、『リーフ電池』だ。」

「電池？なぜ・・・。」

「『リーフ電池』が必要なんだ。物理分身というものを作る。お前の保険だ。聖なる水とリーフ電池でお前の分身を作る。もしもの場合、完全消失を除いての話だが、お前は存在を残すことが出来る。このためさ。」

そして、再び嘔吐寸前になりかねない、真っ暗なところに飛ばされ、公園に出る。元の公園だ。住所とかは知らないけど。

で、リーフ電池とは何なんだろうか。電池はわかるが、リーフって・・・。葉っぱのイメージしか湧き出ない。

「『リーフ電池』とは、光エネルギーを蓄えてある電池だ。リアルで言う光合成という現象で蓄えたエネルギーだ。だからそれを、電池メンのところに会いに行つて、貰う。それだけだ。」

電池メン、電池マンの複数形だろうか。まあそういうことになってしまった。

「じゃあ行くぞ。」

「は、はあ・・・。」

再び真っ暗な空間へ飛ばされ、出てきた場所。

そこは蜂の巣の中身のような場所だ。そこら辺には手足の付いた電池、電池、電池がたくさんいる。

その中の一人が出迎えてくれた。

「こんにちは、私は電池メンの単二型と申します。」
神様が言う。

「『リーフ電池』が欲しいのだが。」

「わかりました。では単四型に持ってきてもらいましょう。」

と、言つて、五つもある笛の一つを出して気味の悪い音を出す。

単二型よりもやせている電池がやってくる。

「単四型です。今現在、『リーフ電池』がありません。材料があれば良いのですが・・・。特殊発光型リーフが必要です。」

「とのことです。取ってきていただけませんか？」

と、頼まれた。神様は言う。

「どこにある？」

単四型が予想してたかのように答える。

「この巢の出口を出たら森です。その光る葉っぱを持ってきてください。」

「わかった。」

そして僕は電池メンの巢を後にし、特殊発光型リーフを取りに森へ向かった。

しばらく歩くと道が二つに分かれていて標識がある。標識には『

太陽の森・月の森』と書いてある。

「どっちだ？」

ま、草つて事はもちろん太陽だろな・・・そう思いオレは左の太陽の森に向かって進む。

「おい、おまえ誰だ！」

森に入つてしばらく進むと突然誰かから声を掛けられた。

「上だ！上！！」

上と言われたのでオレは上を向く。

「・・・・・・・・」

そこにはギラギラと輝く太陽の隣にもう一つ小さな太陽が・・・

「見えないのか？」

よく目を凝らすと黒い点が二つある。

「つたくしうがねーな」

そういつて小さな太陽が落ちてくる。

「オレツチはサン族の shine だ！シャインな！シャイン！英語で死ねと書いてシャインだ！忘れんじゃねえぞ！」

「は、はあ・・・」

「んで、あんた見た見た所リアルのお坊ちやまじゃねえか！こんな所に何の用だい！？」

「特殊発光型リーフが欲しいんですけど・・・」
すると、シャインはニヤツとした。

「ま、いいんだけどねえ」特殊発光型リーフはサンシャイン元帥しか持つてないんだよねえ・・・」

なるほど、サン族は元帥国家なのか・・・

「じゃあ会わせてよ！その元帥に」

「いいよ」

さっきニヤツとしたのでなにか企んでるのかと思ったが案外何も無かった。

「サンシャイン様、お客です！」

シャインにつれて来られた所は森の奥深くだった。

「客とな？」

「はい、特殊発光型リーフを取りに来たようです！」

「と、特殊発光型リーフじゃと！ふざけるな！！！！」

そういうとシャイン元帥がいきなり襲い掛かってきた。

「わ、や、やめてよ！」

しかしサンシャイン元帥は攻撃の手を休めない。

こんな時にあの水鉄砲があれば・・・

オレが落ち込んで下を向くと背中に何かが当たった。

「こ、これは！？」

なんと背中当たったのはあの最強水鉄砲だった。

「おりやりやりやりやりや~~~~~!」

目をつむって水を連射する。

ジュツ!!!!!!

謎の音が聞こえたので目を開けると目の前には黒い塊が……

「げ、元帥様!?!」

シャインがサンシャイン元帥に駆け寄る。そしてその声を聞いて周りからシャイン同様のサン族がたくさん現れた。

「お前よくもサンシャイン元帥を……」

オレはサン族にジリジリと森の隅へ追い込まれる。

「こつちです!」

不意に声が聞こえた。

「こつちに来てください! 私は敵ではありません!」

もう頼れるのはあの声だけだ! オレは必死に声のする場所へダッシュする。

「大丈夫ですか?」

今オレの前には三日月の形をした生物がいる。

「私はムーン族のライトといいます」

「ライト、さん?」

「はい、ライトです。」

そう名乗るいかにも正義のヒーローみたいな顔をした人がいる。それに比べて、巢を出てから何にもしゃべらないこのいい加減な神様なんてこつたい。そして、神様はしゃべり始める。

「とりあえずだ。まず私はジオルの人間だ。名前は無い。ライト、率直に言おう。特殊発光型リーフを譲って欲しい。」

「わかりました。月の森だからこそある特殊発光型リーフは素晴らしいものです。見ていたらどうでしょうか?」

と言って、月の森へ歩くこの一行。なぜ月の森にあるのか疑問を持ちながら進む。

「うへへ。すごいきれいだな。」

「そうだろ。俺も二、三回ここに来たことがある。しかし、この特殊発光型リーフ、問題がある。」

「問題？」

神様でも問題とする問題。何なのだろうか。

「後で話そう。」

と、返事を拒否られた。しかし、この大量にある特殊発光型リーフ、今さらになってなんでさっき太陽の森に行ったのかを後悔する。

「ささ、ここから好きなだけ取っていつてください。」

と、言われたので、手で異様にでかい特殊発光型リーフをちぎろうとしてみる。硬い……。

「ああ、そうだ。今さらになって言うけど、さっきの問題についてだが、特殊発光型リーフは非常に硬くてな、その水鉄砲でも破壊できないんだ。」

「え……。じゃあどうやって持って帰るんですか？」

さっさと言って欲しかったことを言われる。神様曰く、水鉄砲でも破壊できないこの特殊発光型リーフ、つまり、三十キロ以上の力を加えなければ、持ち帰ることは出来ないようだ。

「そこで登場するのはこれさ。」

また鉄砲。黒く塗装されたこの鉄砲はエアガンには見えないほどに立派な鉄砲だ。

「これは、誰かの存在維持に必要な力を使って、発射するスラッシュライフルと言ってな、誰かを犠牲に破壊する必要がある。」

「それは、無理じゃないですか？人を一人犠牲するって……。」

「おいおい、まだそんなこと言ってないだろ。これを使うの。手動発電機というべきかな？というかそれに近い。」

「でかいですね……。」

どっかで見えるトレーニングマシンに似てる。

「と、言うわけで、陸。ここで走りに走って発電をするんだ。」

なんで、と言ってしまいそうな、このマシン、どうやらこの上で

走れば走るほどエネルギーがたまらしい。

「じゃあ十五分間、よい……どん！」

走り始める。

「……………」

「目が死んでんぞ」

人の苦勞も知らないで……………

「しかしこれでエネルギーは溜まったはずです！」

「よし、やつぞ〜」

神様は子供のようににはしゃいでいる。

ばん！！！！！！

とてつもなく大きな音と地響きがオレ達を襲う。

ぐらぐらぐら

何だか周りの木が揺れてるんですが……………

「や、やばいですよ！」

「なぜだ？ムーン」

このKYがあ！！空気よめ〜！！

バサバサバサ

どんどん周りの木が倒れていく。

「ん〜スラッシュライフルを使うと大天使へのストレスも一発で爽

快だなあ〜」

だから空気読みなさい！！

「神様！！いい加減にしないと女神様に言いつけますよ！」

一瞬にして神様の顔から笑みが消えた。これぞまさに鶴のワンボ

イス（一声）！

「直しますからそれだけは〜」

「じゃ、お願いします」

人差し指をクイクイと動かす。そうすると、いかにもどんなトリックを使ったのかわからない、魔法みたいなのが発動される。

「と、いうわけではい。」

特殊発光型リーフを持たされる。リアルの葉っぱではこんな大きさは考えられない。それくらい重い。昔の大きなお金くらい重い。

「じゃあ、迷惑かけてすいません。ライトさん。」

と、苦労ばっかした僕が言う。神様は謝ろうとしない。

「大丈夫です。とりあえず、これも持つていつてください。」

と、ライトさんに言われる。今、僕の手にあるのはなにやらクツキーのような香ばしい匂いがするものだ。

「食べてみてくださいね。」

と、言われた。食べてみる。

おいしい。美味い。との感想しかこぼせないほどおいしいクツキーだった。

「ありがとう。ライトさん。それじゃあさようなら。」

「さようなら。」

そういうことで、月の森を立ち去り、とても重い特殊発光型リーフを電池メンの巣まで持つて帰る。

しかし、どうやら神様は納得いかないような顔をしている。スラッシュライフル、本当に恐ろしい兵器だ。そして、電池メンの巣の入り口に着いた。

第四話 依然そして俄然

「お帰りなさい。ご苦労様です。」

と、ちょうどそこにいた単二型が言う。そこには単四型もいて、その単四型に特殊発光型リーフを渡す。

「ありがとうございます。」

そう言ってくれた。なんだか久しぶりに人に感謝された気がする。人じゃないけど・・・。

「おい、単四型。」

神様が言う。

「なんでしよう?」

「どれくらいで完成するんだ?」

「二十分ほどです。」

「そうか。」

とのこと。しかし、問題が発生する。二十分で完成する。つまり、妹の所にはあと一時間ほどで着かなければならない。とつくに五時間経過している。しかも妹の居場所は僕にはわからない。

「おい、陸、ちょっと待っておけ。ここだな。二十分以内に戻ってくる。」

「は、はい。」

そう言つて、神様は巣を立ち去った。

「ねえ、単二型さん。」

「なんでありましようか?」

「なんで電池メンはこんなところで色々やってるの?」

一番答えにくい質問なのだろうか。単四型は少し考える。

「わかりました。その理由を答えましょう。」

「ありがとうございます。」

「私たち、電池メンはいわゆるエネルギーなどに今までは利用されていました。ところがある日、電池メン単三型の一人がこう言った

のです。『消費されるだけじゃなくて、生産もしてみたい』と。その言葉をみなが受け付けました。そこで、私たちは自分たちのエネルギーを何かに使えないかと、考えました。その結果がこの巢です。工場のようなところで、リーフ電池などたくさん作ることが出来ます。それから、私たちが消費される代わりに、私たちが生産した電池が消費されるようになりました。三百万年ほど前の話です。」

「へへ。電池メンってそういう歴史を持った人々なんだね。」

「はい。それでもう、こちらはとても栄えております。」

そんなことを話しているうちに、神様が帰ってきた。どうやら、取ることの出来なかった聖なる水を持ってきてくれたようだ。

それと同時に単四型もやってきて、リーフ電池を渡してくれた。

「おい、陸。ここにはもう用なしだ。そろそろお前の妹のところに
行こうじゃないか。」

「そうだね。じゃあ、電池メン単二型さん、ありがとう。僕らはそろそろ行くよ。」

「はい、わかりました。元気でいてくださいね。」

「うん。わかったよ。そちらも元気で。」

そう言った後、再び真っ暗な空間が現れて、嘔吐寸前の状態になりそうになる。

目を開けると神様がいる。

「イモウトヲサガセ」

棒読み？

「ハヤクサガセ」

「神様？」

「イケ」

神様にシッシと手で払われてしまったので仕方なくオレは神様の
変な様子を気にしながらも陽菜を探す事にした。

「おひさー」

顔が黒くなってる女神様がいた。

「ど、どうしたんですかその顔?？」

「ああちよつとね」

女神様はサンがしたのと同じような顔をした。

「あの、神様が変わるんですけど……」

「あいつは昔から変よ」

「いや、そういう事じゃなくて……」

「なんでか知りたい?」

「え!? 女神様実は知ってたんですか?」

「当たり前じゃない! だって私がえん……じゃなくて部下の事は何でも知ってるのよ!」

「アアアアアアアアアア~~~~~」

後ろから神様の棒読み叫びが聞こえる。

「か、神様!？」

オレが後ろを振り向くと神様は何かの穴に吸い込まれそうになっている。

「神様!」

オレは神様に向かって走り出す。

「無駄よ」

オレは女神様に肩を掴まれた。

「離してください!」

「あいつは地獄へ送ったわ」

え!?

「次からは私がインストラクターとしてついてあげる! あんなヘツポコよりもこっちの方がもとに戻る確立が高いわよ」

「やだ! 離して!……離せえ!!」

「もう無駄……閻魔様に言っちゃったもん!」

「神様は何にも悪い事してない! 悪い事してるのはあんなの方だ!」

「キャンペーン参加者に専属してるインストラクターが消滅、音信

不通などの場合は代わりのインストラクターがつくのよ！」

女神様の目がぎらつく。

「いいわね！今から私があなたのインストラクターよ！」

「それはどうかな？大天使君！」

女神様の後ろに気の優しそうなスーツを着こなした男の人がいる。

「あら、何かしら？」

「何かしらはこっちの台詞だね！だあれもあなたからあの神様を地獄に落とせとは聞いてないんだけどなあ」

「そ、そう」

話の流れ的にバリ空気が読めるオレはスーツの人が閻魔様だという事に気が付いた。

「閻魔様？神様が最近教師始めたって言ってた閻魔様？」

「ああ、そうだよ。陸君。この大天使は悪い人さ。だからね。」

と言つて、耳元に呟く。

「大天使を地獄に送ろうと思うんだ。そうすれば神様も元通りに戻ってくる。」

「でも女神様はとてつもなく強いから、誰の手にも負えないって言うてましたよ。」

「大丈夫、地獄に送るだけ。私になら出来るよ。」

そう閻魔様は言う。女神様はこちらを見て、イライラした顔を見せている。

「大天使、地獄に行ってくれないか？」

「いやです。私が地獄に落ちたら今まで長い年月をかけてつけた力が封途されてしまいますから。」

封途、よくわからない単語が出た。しかし、空氣的、流れ的には力が使えなくなるということだろう。

「なら、大天使、君を完全消失させる。そのときに手に入った存在の力は全てこの、平田陸君に授ける。」

「は、はあ！？閻魔様、ということは、僕は何がどうなるんですか！？」

いきなり驚いた。誰にも止められないと噂の女神様の力を自分に授かれる？意味がわからない。

「とりあえず閻魔様、そんなことはさせません。リアルの人間にそんなことをしたら・・・。」

「おそろく、『イリオス』の能力を手に入れる。その際に『神宝』は砕け散って、リアルの世界が『ヨクト』と入れ替わり、ジオルの世界が『ヨタ』と入れ替わる。」

よくわからない単語続出。もはや解読不能だ。

「あの・・・『イリオス』って？」

「ああ、『イリオス』とは、世界変革能力だ。だから、仮にその能力を持った上で、こうなつて欲しい。そう思っただけで、世界は変わる。ただし、その能力を手に入れたのは一人だけさ。その人はもういないけど、この世界の創造主と言われている。何年ぐらい前の話なのかな。」

世界変革能力・・・。一回そんな能力を持ちたいと思った。そして、閻魔様は指から光の玉を出して、なんやらの呪文を唱える。

「きゃああああ！！！！」

その瞬間、女神様は、どこかに消えた。

「あれ・・・。」

啞然とした僕に閻魔様は言う。

「大丈夫、地獄に送っただけだ。おそろく君のパートナーはもうすぐ戻ってくるよ。元通りになつてね。」

そう言われた。パートナーを神様だと認識して、待つ。

そして、どこからも無く、現れてこう言った。

「陸、心配させたな。とりあえずお前の妹のところに行くぞ。」

「う、うん。」

そう言つて、閻魔様に別れを告げた。

「がんばれよ。じゃあそろそろ、学校に戻るよ。職員会議だからさ。」

そう言つて、僕らより先に消えた。

「じゃあ行くか。そろそろ。大丈夫だ。妹の場所はしっかり把握している。」

「そうですか。じゃあ行きましょう。」

「ああ。」

だんだん友情が芽生えてきたこの二人。

再び真つ暗な空間に出る。今度は嘔吐しそうになく、なんだか慣れが出てきたようになんでもなかった。神様に認めてもらえたのだろうか。よくわからないけど。

「とりあえず言っておく。リアルではもう一日経っている。それだけだ。」

「わかりました。」

そして、出た先には妹がいる。一日経ったということは、夜の間にずっと僕のそばで起きていてくれたのだろうか。ありがとうと言いたい。

「さあ、行けよ。お前が選んだ体だろ？」

「はい。」

そして、妹にテレパシーで語りかける。

第五話 暴言、愛の如し

またせたな

『お兄ちゃん？』

ああ待つててくれてありがとな！

『別にゲームしてたから暇じゃなかったよ！』

・・・・・・・・・・

オレはお礼を言つて損をしたような気がした。

「そろそろ妹にもお前の姿が見えるはずだ！」

「か、神様！」

「ああ、実に不覚だった・・・・・・・・まさか大天使が七年前のことを根に持つていたとはなあ・・・・・・・・」

「七年前？」

「ああ、七年前大天使の目を盗んで大天使のタイヤキをネコババしちゃったんだよ！ずっとそれを根に持つてたみたいでさあ」

「それで地獄に落とされたんかい！」

「お兄ちゃん？」

「お！見えるようになったか」

「誰？このキツコロは？」

キツコロというのはもちろん愛地球博のイメキャラのキツコロで無く短縮言葉だ！時間が無いが説明しよう！

キ 〓 キモくて

ツコ 〓 殺したいほど口臭のキツイ

口 〓 老人

となる！

「キツコロかぁ・・・・・・・・うれしいなあ！」

やはりこの人KYだ！

「へえ、キツコロって言つて喜んだのおじさんが始めてだよ！」

陽菜もKYかい！神様がキツコロの意味知らないの感覚で分かれ

よ！

「ま、私はキツコロじゃなくて神様だがね……」

「お兄ちゃん、この人逝っちゃってない？」

「五分の四位は……」

「さ、時間が無いのでさつさと『神宝』を探しに行きますよ！」

「でも神宝はもう……」

「まさか自分がイリオスっちゃってるとでも思ってる系？」

「違うの？」

確かに閻魔様はオレに「イリオスの力を授ける！」とまで断言はしてなかったな……

「じゃ、行こうよ！」

陽菜の声で現実に戻される。

「よし……」

「行こうかね」

そう言うとなぜか神様はナメクジのように這って進んでいる。

「と、言うわけで、その二人、と言ってもパートナーなだけだかどね。」

「うるさい、バカ、だまれ、キツコロ。」

さつそく無表情に暴言来た。

「でさ、変な人」

「変な人じゃないだろ。この人は神様だ。」

「ふーん。でさ、変な人。」

僕の言った事を無視する。そして、妹が神様に暴言を連打することにより、神様は六分の五位逝きそうな勢いだったが、あまりにも早いと言わざるを得ない早さで立ち直った。

「さつそくだが、このキャンペーンは対象の体と誰かの体を入れ替えることでやつと効果が出るんですがね。はい。っていうか陸の妹さん、聞いてますか？僕たちここまで来るのに超苦労したんですけど？その苦労わかってますか？」

「うるさい。変な人。」

はい、この一言で会話終了。

かわいそうな神様を見捨てて置けなくなった僕は語りかける。

「ごめんなさいね。陽奈は無表情に暴言を吐くやつですから。」

「陽奈っていうのね。もう本当にかわいそうだよ。俺。人生九百万年ぐらい過ごしてきたけど、今までで一番、本当にかわいそうだよ。」

「あゝかわいそうですね。残念ながら陽奈は僕に対して暴言はあまり吐きませんから。その代わり『キツコロ』に出会って、すっげえ暴言吐きますよ。」

陽奈のいやなところを少しだけ話した。本当に嫌なやつでしたから。「で、その『キツコロ』ってなんなのさ？」

僕に言われた。とりあえず、かわいそうだけど、訊かれたからには言わないとね。僕も半分神様いじめてるつもりだけど。

「え」と、確か略語で、『キ』がきもくて、『ツコ』が殺したいほど口臭のキツイで、『ロ』は老人。だったような気がします。」

「きもくて殺したいほど口臭のキツイ老人。ねえ俺老人に見える？これでも九百四十三万年と五千二百十年過ごしてきたけど、肌の手入れはちゃんとしてるよ。なのに老人って……。」

きゅうひやくよんじゅうさんまんごせんにひやくじゅうねん。うはー、平仮名めっちゃなが。それに比べて9435210年、なんという読みやすさ。素晴らしきかなアラビア数字。

「ねえ、息も臭くないでしょ？」

「いや、臭いです。ニンニク臭いです。ぎょーざ食べた？」

「き、昨日の夕飯……。」

とのこと、やはり息が臭いのは今まで我慢してきたが、臭い。めっちゃ臭い。

「ほら、ガムあげますから。臭い息もとれるミントのガムですよ。」

「ありがとう。本当にありがとう。」

と、言われる。ガム一枚でこんなに感謝されることって滅多に無いんだが……。

「でさ、いい加減にしようぜ。無表情で暴言吐くのやめようぜ。陽奈。」

とりあえず、陽奈に言っておく。キツコロに出会ったときは必ず言う。そして、いつも通りに陽奈は答えた。

「嫌です。無理です。断ります。暴言は文化です。暴言は正直さを表すものです。暴言は私の宝物です。私を殺すつもりですか？」

でた、基本的暴言の尊重。これは人権を暴言に言い換えたもので、その中身も暴言しか尊重されてない。これは僕が名づけたもので、妹も納得してくれた。

でも、よつぽどのが無い限りコイツの暴言は直らないだろう。目上の人にも、同級生にも、下級生にも幼稚園生にも気に入らなかつたら暴言を吐く。なんという暴言好きだ。こんな妹、この世に一人だろうよ。

「変な人。いい加減帰っていいですか？暇です。」

「ねえ、なんで君はそんなに暴言吐いているのに暇になるの？気持ち良かったりしないの？ねえ、聞いてる？」

神様がなんだか今までに無い妹の負け方をしてこのままでは納得いきそうに無い模様。

「これが日課ですから。もう飽きちゃいました。」

「じゃあやめようよ。なんでやめないの？」

泣き狂いそうな神様はそう言う。無駄だとは思っけどなあ・・・。

「無理です。癖になっちゃいましたから。人間そう簡単には変わりませんよ。わかりましたか？」

テレパシーで話している時の性格とは有り得ないほどの違いだ。コイツ、ヤバイ。意味不明な暴言で神様を泣かせちゃってるよ。

「ねえ、君。目的わかってる？」

「うるさいです。変な人。でも一応答えましょう。『神宝』というものを手に入れてお兄ちゃんを生き返らせるんですね。お兄ちゃんから聞きました。」

「じゃあさ、僕の言うこと聞いてくれない？そうでもしないと『神

宝』手に入らないよ?」

と、言う。たしかにそれはそうだろうと、陽奈は納得したようで、歩くのをやめて、こう言う。

「じゃあさっさとそれを言えよ。変な人。」

「変な人じゃないですよ。無表情でそんなこと言う人初めて会ったよ。たぶん。で、とりあえず、ここから移動したいと思う。その場所『神宝』を探すことが出来るから。」

もう手に負えない陽奈の話し相手を神様に託したところで、神様があの真つ暗な空間を利用して移動しようと、言った。

そして、陽奈が首をコクリと動かしたところで、目の前が真つ暗になる。そして、目が開けたところにはある光景。

電池メンの巣だった。

「何処ココ?」

と、陽奈が言う。

「ああ、さっきも来たんだが、電池メンの巣と言ってな、電池が住んでる。」

「ふーん。あつそ。」

やっぱりこの妹ひどい。絶対ひどい。

「で、神様、今度はリーフ電池の次に何を?」

「ここには『神宝』のパーツがある。三つのうちの一つだ。そのついでに、リーフ電池と電池メン単一型に着いてきてもらう。」

とつさにリーフ電池に関連付く単語を思い出す。そして、神様に質問。

「というと、陽奈の物理分身を?」

「その通り、聖なる水はまだあるしね。それと、単一型の能力で『ヨクト』の世界まで飛ぶように頼む。『ヨクト』には俺の力では飛べないんだ。」

「『ヨクト』にも『神宝』のパーツが?」

とりあえず、勘付いたことは適当に言うておく。そうでもない又何もしゃべれなくなってしまう。

「ああ、違う。『ヨクト』には俺に代わる次の神様がいる。だからソイツに会って、俺はそこで元の仕事に戻る。そうなるのさ。」
「ということは、この神様とはもうすぐで別れということになる。やつといい加減な神様から離れられそうだ。」

「ちなみに言うと、今のでちょうどジオルの時間で一日経った。だから、あとリアルの時間で三日以内に『神宝』を探さなきゃそのまま死ぬ。わかってるな？」

「わかりました。じゃあ入りましょうか。」

何も口出ししていなかった陽奈は、ちょっと目をキラキラさせて、ここに入る。そっぴや陽奈はなぜこんなところに来て驚かなかったのだろうか。

「こんにちは、私は電池メン単二型です……。またいらっしやったんですか。それとそこのお嬢さんは？」

相変わらず単二型がここを任されているようだ。

「単二型、とりあえずここに置いてある、『神宝』を取りに来た。許可をいただきたい。」

「わかりました。では単三型に任せさせてください。」

そして、また五つもある笛の一つを吹いて、単三型だと思われるやつがやってくる。

「こんにちは、俺は単三型、『神宝』のありかを途中まで教えてやるぜ。着いてきてくれ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1415d/>

リバイバル・ヨミ・プロジェクト

2010年11月12日19時13分発行